2006 11. 海の道17

連載「うみの物語」⑨

藤堂高虎は海が好きだった

鳥羽・海の博物館館長
石原　義剛

意外と思われるだろうが、築城家としても有名な戦国武将・高虎は海が好きだった。

弘治二(一五五六)年近江国犬上郡藤堂村(現在の滋賀県甲良町)に生まれた藤堂高虎(幼名は与吉)がなぜに海好きの大名になったのか不思議である。生まれた地は、直接は琵琶湖に面していないが、若い時代、高虎は琵琶湖周辺の有力武士の郎党として働いた。琵琶湖という海がたえず舞台であったといえる。湖の湛える水も海の水に変わりなかったのか。

太閤記は寛永年間の一六二五年頃に小瀬甫庵によって著かれた豊臣秀吉の一代記であるが、悪名高い朝鮮出兵の一度目、文禄二(一五九三)年、「朝鮮国船手之勢」の中で「藤堂佐渡守」の名が現れる。二千人を率いており、船手の大将と目される九鬼大隈守、脇坂中務少輔の一千五百人よりも多い。

ただ高虎は当時、二万石を拝領していたが、天正一九(一五九一)年に死んだ秀吉の弟・秀長の後を継いだ紀伊・大和の領主・秀保の重臣にすぎなかった。したがって太閤記の記載は正確ではない。残っている天正二十(一五九二)年の朝鮮出陣を命じた秀吉朱印状には「大和大納言」とあり、高虎の名はない。実質的には秀保すなわち大和大納言の軍を高虎が指揮したのであるが。

藤堂高虎が独立した大名になるのは、二年後、文禄四(一五九五)年、秀保が急逝して大和豊臣家が途絶えた後のことである。高虎は秀保の死後いったん出家して高野山に入ったが、秀吉に請われて下山し、伊予板島七万石の大名になった。現在の宇和島である。二度目の朝鮮出兵は慶長元(一五九六)年で、高虎は水軍大将格として自領伊予の来島衆など二千八百の水軍を率いて参戦し、直後、秀吉の死による朝鮮撤退に尽力している。

最近刊行された好著「江戸時代の設計者　異能の武将・藤堂高虎」(藤田達生著)に、天正十九年すでに高虎が、朝鮮出兵に備えて「紀伊国東牟婁郡の水軍衆で熊野新宮速玉社に属した小山氏に指令を与えて、出陣への態勢を整えている」と記されている。この小山は中世の熊野水軍の一角、古座に根拠を置くが、どうやって指令を出せるほどの関係を築いたのか、興味のあるところである。しかし、秀長の下で高虎は四国や中国に絶え間なく出陣しており、それらはすべて海を越えて軍を進めていることから考えると、高虎が相当な水軍組織を傘下に統率していたと思われる。彼が海好きになった理由はその辺にあるのではないかしら。少なくとも、高虎は海の重要性をよく知っていた。

慶長十三(一六〇八)年、家康から伊勢・伊賀二十二万石をもらって大大名となった高虎が全面改修した津城には堀が巡らされており、海水による干満があったという。岩田川からその堀を伝って、海へ船が出入りしたという。高虎の海への強い意識がくみとれる。

藤堂高虎公座像(津観音大宝院蔵)